

府中市健康地域づくり審議会
第13回次世代創造分科会 報告書

- 1 日 時：平成28年2月24日（水）13：30～15：00
- 2 場 所：府中市役所2階第一応接室
- 3 出席者：谷 秀 樹（分科会会長） 板 橋 千代美（分科会副会長）
吉 原 純（分科会委員） 坂 永 弥 生（分科会委員）
宗 藤 正 典（分科会委員） 藤 井 敬 子（分科会委員）
寺 岡 暉（職権委員）

4 概 要

- (1) 開 会
- (2) 分科会長あいさつ
- (3) 議 事
 - ①議題 政策指標「次世代を担う人口量の確保」のための目標値設定について
 - ②議題 平成27年度少子化対策関連事業の進捗状況について
 - ③議題 平成28年度主要事業について

【主な質疑・意見】

委員：有配偶者率は、指標として安定したものか。

事務局：転出転入の関係がある。子どもを産んでいただくためには、結婚が前提となるので、結婚に向けた取組をすることで一人でも多く子どもたちが出生しやすい取組を目指しているので、変動はあるが、この有配偶者率を追っていくことに意義があると思っている。

委員：中学生の啓発講演会のアンケートを見ると、しっかりしたことを書いている。次世代創造分科会の中学生版をしてみたら、いい意見が出るかもしれない。

事務局：中学生にストレートに結婚という言葉を出すのではなく、今の自分の社会の中で家族という社会があり、地域・学校があってという話から、自分がそこで守られている、今度は逆の立場になって社会に出て役に立つ人になるというきっかけ作りになったと思う。非常に有意義な授業だと思うので、来年度は是非4中学校で実施したい。

委員：男女共同参画フォーラムは男性だけが参加するものなのか。

事務局：一般市民対象であり、老若男女対象である。

委員：男性に特に参加してもらいたいのか。

事務局：そのとおり。

委員：男性の意識改革が重要とあるので、男性が主体となるものかと思った。一緒に考えていこうという形で女性ももちろん参加いただきたい。

委員：課題として啓発や周知方法について出てくるが、他の団体と手を組めたら参加者も増えるか。参加方法を見ているとやはりおせっかいさんが無理矢理参加させるというのが一番効果がある。

委員：イベント等の開催やおせっかい育成事業というのは公募するのか。

事務局：そのとおり。

委員：不妊治療については続けていってもらいたい。

委員：医療費の助成が中学生までになったのがいいと思った。知人の息子さんの子どもが、府中市は小学生になると医療費がかかるということで、別の市に住んでいるということを知ったばかり。そういった方が帰って来られるかと思う。

委員：このような支援はこの地域では少ないのか。

事務局：県内の北部は多いが、福山市や東広島市などは予定はないと聞いている。尾道市や三原市においても拡大されている。合わせて、前回の分科会においても使いにくいといったご意見があったちゅちゅを使いやすくする機能を充実するとともに発信していかななくてはいけないと考えている。使い方のパンフレットをお配りして、いかに活用できるかという取組も行っていきたい。

委員：ちゅちゅにそんなに入れ込む必要があるのかと思う。ママ友の情報より上回ってないからちゅちゅを見ない。困ったときは、ママ友に聞くほうが早い。ちゅちゅが全然それに追いついてない。更新は定番のものだけ。それを改善するためにリニューアルしたのではないか。それをさらに盛り上げるというのは前にやっておかないといけなかったのではないか。

事務局：今以上に費用をかけるということではなく、使い方についてももう少し工夫が必要ではないかと思っている。保守の中で内容を改良していく。実際にママ友で情報をつなげる方たちはいいが、そういった方たちばかりではないので、ちゅちゅを頼りにしているユーザーの方もいらっしゃると思うし、ユーザーを増やしたいという思いもあるので、改良に意見をいただきながら、十分に活用できるようにもっていきたい。

委員：ちゅちゅは皆さんの意見を聞くところがあるのか。

事務局：投稿できるようなシステムではあるが、なかなか投稿数が少ない状況。

委員：ちゅちゅはどういうところで計画しているのか。

事務局：市女性こども課である。

委員：ママに集まってもらって、企画委員会のようなものを開いて、ちゅちゅに対するいろいろな意見を言ってもらったらいい。

委員：子育て訪問サポート事業は、子育てが不安で上手くいかない家庭に対してということであるが、窓口やきっかけというのはどうなるのか。

事務局：「こんにちは赤ちゃん事業」という保健師が生後1か月に訪問する事業があるが、そのときに心配だなという情報がキャッチできる。そういったところから洗い

出しをして次の支援につなげていく

委員：その時ではなく、後から支援を受けたいという場合はどうなるのか。

事務局：保育所や保育所に通っておられない家庭については、女性こども課に窓口がある要対協という児童虐待の部門へ情報が来る。また民生委員児童委員や本人からの連絡もある。

委員：そこまではっきりしてからの支援になるのか。もっと気軽にといいものかと思った。

事務局：母子保健法に基づいて、各地区担当の保健師が家庭を訪問したときに相談に乗らせていただいたり、または保健師の部門へ電話があるなど、相談業務は日々行っている。その中で特に児童虐待の予防、ネグレクトと一般に言われる家庭を地域の保健師が訪問したとき、そうなる可能性が高いと判断した場合に、現在も地域保健師が女性こども課の虐待部門と連携し、実際は対応しているが、事業としてはやっていない。そこを見える化として支援計画というものをしっかり作って制度化を図り、事業として実施する。実際にやっているものを形にしてやるというイメージ。

事務局：軽度な相談ではなく、この事業として行うのは、もう少し本当に支援が必要な家庭、例えば、自分から支援を求められない、周りは心配しているが、本当に必要な支援が届いていないそういった家庭を対象とした事業である。

委員：どうやって見つけるのか。

事務局：担当の保健師から情報がくる。

委員：わかるのか。

事務局：子どもが生まれると、拒否される家庭がいくらかあるがほぼ100%の家庭へ保健師が必ず訪問する。その最初の聞き取りの中で、支援が必要な方が分かる。実際はそれを現在も女性こども課と地域保健師がいる部門とで連携をとってサポートしているが、それをさらに制度として運営をしていく事業である。

事務局：自分で声をあげる人は分かりやすい。そうではない人、ちゅちゅも見ない、ママ友もない、周りに親戚や親しい人もいない人への支援が必要。

委員：周りに支援者がいても、ピンとこないかもしれない。そういう人は助けを求める先が分からないだろう。

委員：新生児訪問を拒否される家庭があるとお聞きしたが、府中市内でもそういった家庭があるということか。

事務局：そのまま放置しておくのではなく、保健師が訪問に向けてアプローチしている。

委員：年間何件くらいありそうか。

事務局：15～30件ではないかと推測している。予算については、育児・家事援助として、訪問介護員が具体的に食事を作るだけではなく、自立していただくための食事の仕方の指導なども想定している。全体で30件程度と推測しているが、

専門的相談支援の割合が多いかと思う。

委員：軽度というよりももう少し深刻な問題があるような場合ということか。

委員：次世代創造講演会は、今回は伝えるということをやってみたが、次はどのように次世代の親に当事者になってもらうかということをもっとやってみた方がいいのではないか。例えば、市内の事業所に小学生や中学生を取材に行かせて、それを新聞や広報等に子どもの写真を載せて記事にする。市内あちこちでいろんな考えを持った人たちがこういう事業に取り組んでいるんだ、どうしてだろうということも自然に考えていってもらえたらと思う。子どもたちが主体となって動いたことを市がどんどん取り上げて皆さんに伝えるというのが、次につながると思う。

事務局：今回の講演会で少子化対策について初めて知ったお子さんもいたのではないかなと思う。そのきっかけ作りとして今年やったので、当初考えていたディスカッションの場を持つ等、今年の実績を元に来年度は考えていきたいと思う。また、この事業を取組んだ上で、委員が言われたような取組も考えていけたらいいと思う。

委員：ワークショップにいろいろ参加しているが、あまり楽しくない。もし、学生を主体にして何かをするのであれば、一からみんなで考えさせてまとめさせて発表までさせる。最後まできちり考えさせてやるというのは、将来自分がどうすべきかということにつながるのではないかな。将来の親づくりに近道だと思う。

委員：和光園の支援センターはなくなるのか。

事務局：地域や保護者への対応は保育所が担っていけると思うが、和光園の支援センターとしての機能は移ることになる。

委員：病児保育を上下北市民病院でも行ってほしい。上下地区もニーズがあるので、検討していただきたい。

委員：保護者にインフルエンザや嘔吐下痢で休んでくださいとなかなか言えない。この女性活躍のための企業向けセミナーの内容を充実しながら、みんなで助け合って子育てしていけたらいい。

委員：病児保育の定員の「おおむね3名」というのが一体どうなのか。インフルエンザが流行ったときは、その3席を奪い合うという感じがする。ただ、0件の月もあるかもしれないし、すごくやりにくいと思う。

委員：利用しやすければ良いが、手続きがどうなのか。

委員：かかりつけ医から診断してもらってからか。そこで空きがあるかどうかを確認しないといけないということか。

事務局：そのとおり。子どもの健康に係わることなので最低限の書類はどうしても必要になってくる。そこはご了承いただいた上で、すべてを引き受ける容量もないので、できることからできる量でやっていく。

委員：和光園の支援センターは、府中の子育ての「売り」の施設だと思う。自分の親世代の先生がいつも朗らかに迎えてくれて、お母さんを見守ってくれ、助けてくれ、話を聞いてくれるというのが他の施設を上回っていると思っていた。そんな所をなくすのはもったいないと感じる。

事務局：そういったご意見を他の支援センターにもお伝えする。府中市の中には4か所あり、数的には充足していると市は思っているのですが、数を増やすことは検討しなかった。今後はそういったノウハウを生かして、天満屋さんという商業施設で府中市の子育て支援をアピールできると思っている。そういった意見をどんどん市の子育て支援全体に生かしていこうと思うので、また足を運んでいただきたい。

委員：事業が非常に多彩。これをやっただけでも十分だと思うが、問題はもっと周知されることと、それぞれの事業が今以上に行われるように実施することが肝心だと思う。まだ市民に対する十分な周知と理解ができていないのではないか。

(4) 事務連絡

(5) 閉会 分科会副会長あいさつ